フリードリヒ・リストにおける鉄道の政治的・社会的意義について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藏本, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15544

フリードリヒ・リストにおける鉄道の政治的･社会的意義について

藏　本　　忍

「ドイツ鉄道の父」と呼ばれるフリードリヒ・リストは1833年の「全ドイツの鉄道組織の基礎としてのザクセンの鉄道組織について、特にライプツィヒードレスデン間の鉄道建設について」の末尾に一葉の鉄道網の地図を掲げて、ドイツに敷設されるべき鉄道網の将来あるべき姿

を提示した。その後の鉄道はこの地図をなぞるかのように建設された点から見て、これはリストの慧眼を示す証左とも言えよう。しかし、この時点では既にドイツ各地に鉄道建設委員会が設置されて、鉄道の敷設計画が練られていたとはいえ、実際の鉄道建設は1835年のバイエルン王国におけるニュルンベルクーフュルト間の開通を待たなければならなかった。しかも、鉄道建設に対する諸邦政府や君主の態度はかなり冷淡であり、また君主によっては敵対的ですらあったために、どこでも初期の建設主体は主として民間企業家であった。

ドイツにおける鉄道の建設は分断された国家のなかで行われた。従って、鉄道がもたらし得る利害はそれぞれの邦の見地から斟酌されたし、民間企業家もこうした配慮から自由ではなかった。それをよく示しているのが、リスト自身もその建設に直接かかわったライプツィヒードレスデン間の鉄道である。この鉄道は1836年に工事を開始し、1837年にライプツィヒーアルテン間の部分開通にこぎつけ、1839年8月に全面開通した118kmのドイツ最初の本格的鉄道と言われている。1835年6月5日に開催された第1回株主総会におけるリストとハルコルトを中心とするザクセン王国における民間企業家の対立のなかに、鉄道に対する両者の考え方の相違が鮮明に反映されている。リストはここではヴュルテンベルク出身の一人の外国人にすぎなかった。彼の思考も活動もドイツ全体を見据えたものであり、鉄道がもたらす利益は一企業や一王国の範囲に止まるものではなかった。しかし、ハルコルトにとっては会社と領邦だけが重要であった。彼にとってリストの全ドイツを視野に入れた鉄道建設は空想にすぎなかった。